
愛ってコトバ

NAoK I CH I

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛ってコトバ

【Nコード】

N5905D

【作者名】

NAOKICHI

【あらすじ】

愛のしるしの続編です。やっぱり大好きな人には好きって言ってほしい…好きだから触れたいの…大切なのは今。私はそう思いたいのよ…………

「ふう」

1秒…また1秒

何もしてない。

ただ、呼吸して寝てるだけ

何もしてないのに刻々と時間は刻まれていく
ほら…また1秒。

私…生きてる

「奈央!!こっちこっち」

「ごめんねー遅くなっちゃって」

今日はクラスみんななどの打ち上げだった
風邪がひどくて少し遅れていった

無意識に富田の姿を探していた

わりと時間はかからなかった

ばちつと目が合う

少し、嬉しくなって手を小さく振った
ちよつとだけ微笑んでくれた

この頃…1年生の子が富田を好きだって聞いた
結構かわいくて富田と同じ部活の子…
たぶん本人は気づいてないよね??

あーあー

なんで、こう…マンガみたいにくましくないのかな…
いつもマンガのヒロインはきらきらしてて、幸せそうに笑っていて
なんで、私たちはマンガみたいにくましくないのかな？？

「ふう」

あんまり心配させないでよ

なんでこんなに不安になってるかって言うと…

富田の愛って感じたことって、全然ない
半年記念から2ヶ月たった今でも2度目のキスはない

あーあー

好き……大好き

恋してるって楽しいけど、辛い

でも今、私恋しちゃってるなあ

こそつと栞が私に言った

「りなちゃん、告ったらしいよ」

「ええっ??」

びっくりして大きな声がつい出て軽くみんながこっちを向いたりなちゃんって言うのは富田のことが好きだって言う1年生の子。

「ど、どうだつて??」

「もちろん、断ったらしいよ」

ちよつと…安心

「よかったね」

にやつと笑う

「何が!!!!!!」

「顔赤いよ??」

「知りませんっ!!!!」

逃げるようにコップを持ってドリンクをつぎにいった

「ふう」

「大丈夫??体調悪そう」

富田が心配そうな顔でかけてきてくれた

「大丈夫だよ」

やっぱり風邪なのかも

胸が苦しい

ときどきする

熱がある

…わかんない、あなたの前だからかな？？

さつと持っているコップを持ってくれた

…ほら、君ってなんでそんなに優しいの？？

私が何も知らないと思って安心してるでしょう？？？

違うよ、それは…違うの

ねえ、気づいてよ

カララン

「よお
」

声のした方を振り返る

手を振ってこちらにやってきた

望だ…

1組のメンバーもそろそろとやってきた

「俺等もここで食いにきた」

…見慣れた顔

大きい手

笑い方
話し方

とっさに見せる癖

すべて覚えていた

そう、私が前本当に大好きだった人。

この人に何度泣かされたかな？

好きすぎて話すときは顔も見られなくて、顔はもうりんご病みたいだった

君だって、耳真っ赤だったよ？

…迷惑かけちゃってごめんね、私のせいでいつも冷やかされてた手紙に弱々しい「好き」の文字。初めての告白ですごいときどきしてた

胸が痛くて壊れちゃいそうなくらいときどきしてたの

でも…なぜか読めなかったって。

洗濯されちゃったって

…そんなことあるのかよって思いつつ気づいたら電話してた

「…ごめん、好きなの」

本当にどうしようもないくらい好きだった

君に聞こえないかもしれないくらいのささやき声で愛のコトバを口にした

でも間があってから、気づいたら電話は切れてて…

ああ、私はふられたんだなあって思った…

本当に悲しくって涙は枯れることを知らなかったよ

「もう、好きじゃない」

友達に言いまくった

自分に言い聞かせてるだけかもしれない
だって、今でもあなたのこと目で追ってる私がいたの

いつまでも捨てられなかった誕生日プレゼントだったペアのキーホルダーは、机の中で眠っていた

誕生日にさしでしたら、君は走って帰ってったね

…ひどい人

忘れられたら、楽なのに

いつまでも君にときめいちゃうのは…なんでだろう??

「これ、あげるよ」

たまたま前の席の富田にあげた

この頃、仲がよくて…いづるのがおもしろいなと思っている人。

だから君が捨ててくれればいいと思った。

自分では捨てられなかったから

でもその見たくもないキーホルダーは1週間たっても2週間たっても君の筆箱にぶらさがっていたね

ただ、嬉しかった

単純にすごく嬉しかったの

望がしてくれなかったことを富田はさらっとしてくれた

ただ、それだけ。

それで君がすっごい可愛く見えてしまったの

本当に…恋の始まりって単純だよな

たぶん…望を嫌いになったら次の恋なんてやってこないのだ、と思
っていた

でも傷ついた私の心は行き場のないあふれるような想いを誰かに注
ぎたかっただけかもしれない

あの時のように笑って話せたら…

何度も思った

だけど時は止まることを知らない

幾度となく押し上げてくる悲しみは私を暗い世界へと追いやった

それでも月日は流れ、新しい恋を運んでくる

恋ってそうゆうものなんだ…“癒し”を求める心に響くのはきつと
恋なんだろうな

誰かが言ってた気がする

地球上でもっとも重い病は恋だって、薬がないから治らないって
どうしたら私はこの病から逃れることができるのかな・・・??

ふと見上げる空には星がちりばめられてた

月があまりにも綺麗で…いつもより距離を感じた

空や月にまでふられちゃったみたいに感じた

辛かったり嬉しかったり

悲しくって泣きたくなったり

会いたいと思えど会えないむなしさ…

この想いからどう逃げればいいんだろう??

そんなことを永遠と考えていた

「…お、ねえ、奈央??聞いてますかぁー!!」
「はっ、はいい」

思わず叫んでしまった

気づけば、望が私の顔を覗き込んでいた
「な…なんざんしょ?」

「ちょっと、来て」
ムリに手を引かれあえなく退出

「待つて!!何??寒いよ…」
外に連れ出されて私は薄着で寒かった

「言いたいことがあって今日は来たんだ」
びくつと体が反応した
何したつけ？怒られるようなこと…した！？

ここしばらくの間私たちが話すなんてめったになかった
1回だけ話しかけたが軽く、冷たく返されたのもう話しかけるこ
とはなかった

そう、すごい久しぶりに話す…

「俺さあ、お前のこと別に嫌いじゃなかったよ
あの時告白してくれたじゃん？頭真っ白になっちゃって何言っ
ていいかわからなくなっちゃっただけ。

電話もきっちゃってごめんね。

突然すぎて何も言えなかったんだ…

これだけ伝えたかったんだ。

何か言いたいことある？」

言いたいこと…あるよ、いっぱいね
でも、それって1年以上前の話だよ？
半年もかけて、君のこと忘れたんだよ…君が笑えばなぜか悲しくな
った

失恋ってそうゆうことでしょ？

痛いほど君が教えてくれたじゃん

私は初めて失恋を教わったんだから

「…別に気にしてないよ」

うそ、すごい気にしてた

「てゆーか、覚えてたことにびっくり！！」

あの時は好きすぎて周りが見えなくなってた
私こそ…ごめんね」

…本心、だけど大事なこと隠してる
なんでだろう、今は素直になってもいい時だよね？
君の前では本当の自分がだせないの…素直になんかなれないの…

なんで？？

「今は誰が好き？」

「ええームリだよ、言えないって…！」

…軽々しく望になんか言えないよ

今だって忘れたんじゃないくて、君へのキモチを隠しただけなんだから

「1度はつかあいかけたなかだろー言えってえ…！」

そんなこと一回も思ったことなんてない

いまさら嫌いじゃなかったとか、何を言い出すの？

どうせ、あの時だって告白OKする気なかったんでしょ？
それなのに…

「…知らない」

「別に…いいだろ？教えろって…！」

「絶対、言わない！知らない…もう…ほっというて…」

望は軽く言ってるだけなんだろうけど私には大きいんだよ
なんで…気づいてくれないの？？

「もしかして、まだ俺のこと好きってこと？」
は…???

好きじゃないって…

好きなのは…君じゃない…きっと…いや、絶対に…そう言い聞かせ
てきたんだから

「好きな人は

いるよ、だから安心してね??

でも今はまだ言えないかも。」

付き合ってるのって言えたらな。

たったそれだけのこと。

なのに何かが怖くて、悲しくてそのコトバを言うことはできなかった

簡単なことだよ

ただ、それだけ。でかたづけられるようなちっぽけなコトバ
でも出てこなかった…

私は弱いから何も壊しなくなかったの…本当に私は弱いなあ…

望は今も昔も何もわかってない

ここまでひきずってる私も私なのだけど…

昔の記憶ももう忘れる。これだけはとっておこうなんてキモチも捨
てる

絶対に絶対に、今度こそ忘れるよ…

みんなの所へ戻る前にトイレへ行つて、顔を洗った

涙のあとが頬についていた

「ふう」

それを服の袖でぬぐった

…いやな顔。

こんなんじゃ愛想つかされちゃうね…

「ふう」

「何？さっきの、びっくりしたじゃん。どーしたの？」
栞が聞いてくる

「たいした話じゃなかったよー」
軽く笑みを浮かべた

栞は私の話を無視して、トイレへとつれこんだ
「奈央、泣いてる…」

栞はせつなそうな顔で私を覗き込んだ
あんな笑い方も見逃さなかった
私のこと…わかってくれてる…ごめんね

「うつ…だつて…ムリだよ…」
いまさら、嫌いじゃないとか言うの！！私のことふったくせにさ
あ…

1年以上もたつてて…しかも6年間も好きで忘れられるわけない
じゃん

もう日々の生活に望があるのが私の普通だった！！
それでも…あきらめたつていうのに…
大人から見たら14歳の私の言ってることなんておままごとって

言うかもしれないけど、本気で好きだったんだよ
そんな…忘れられるわけないじゃん…

昔の記憶を思い出させといて…望は何がしたいのかわからないよ
今でもあの時の望の顔とか、嬉しかったこととか忘れられないの
…だから錯覚をおこしちゃったの

昔の記憶があまりにも鮮明に思い出せるから富田が一瞬見えなくなっ
った…

ひどいよね、私

わかってるんだよ！！でも…私の中で何かが引つかかるの…

なんで…いまさら…思い出させるようなことするの…」

栞はぽんぽんと私の頭をなでてくれた

「…そうだよね、奈央すごい好きだったもんね
忘れられないよ、普通。

とりあえず富田がすごい心配してたみたいだから…ほーら！！元
気出せっ

泣き顔ぶさいよ？

笑顔の方が奈央は可愛いんだから」

ねえ、私に気づいたら君はなんていつてくれる？

コトバなんて君はくれないか

いつも不安だけ残して愛はくれない

好きだよ、大好きなの

なんで??

どーして??

私に魅力がないからななあ??

「ふう」

いつまでも君のことが見ていたい

見ていたら声が聞きたくなるの

声を聞いてしまったら、話したくなっちゃうじゃん

話したらずっと一緒にいたくて離れられない

一緒の時間をすごしてしまえば、私は君に触れたくてたまらない
それって、変??

何か間違ってるのかな…

ただ私が君のこと大好きってキモチの表れだよね??

「帰ろうか」

誰かが口にしてみんな一斉に立った

頭が痛い
気持ちが悪い
胸が苦しい
不思議とほかほかする
なんだか涙がでできそう
なんでだろう…

「奈央…っ！！熱あるじゃん、大丈夫？？」
「…うん」
「チャリの後ろ乗せてもらいなね？？」

こくと、うなずいた
ふわぁーっとした気分でなんかくらくらする

「…え？？」
急に腕をつかまれてびっくりして、思わず声が出た
「ふらついてる、大丈夫！？ムリ…するなよ」
…富田
「大丈夫…帰ろ？？」

「後ろ乗ってけば」
後ろから声がした
…望だ

「んー、いーよ。栞に乗せてもらおうかなあって」
腕をつかんでいた富田の手が離れていった

なんだか、寒くなった気がした

今望は私の恋の邪魔したんだよ？
いいかげん…鈍感なおしてよ
迷惑だから…迷惑なんだから…

キーコキーコ

「…奈央は愛されてるんだよ
みんなから。いいことじゃん、富田は奈央のこと好きなんだし…
望はさあ、奈央にとって大きいかもしれないけど忘れるって言っ
のも1つの愛の形かもしれないよ」

確かに…

愛の形は1つじゃないよね

気づけば、頬をぬらしていた
冷たい風が吹きぬけ頬のしずくをより冷たく、頬を痛くした

君への隠してた想いも今日で本当に封印するよ

この寒空の下で流した涙が最後です

さよなら…

本当に好きでした

そして…

「ありがとう」

「…奈央、送ってく」

あるていどの所まできたらみんなとも別れなければいけなかった
富田が心配そうに顔を覗き込んでいた

「ありがとう」

「…」

「…望と何話してたの??」
「…」

「別にたいした話じゃなかったよ」

「ふーん…望って奈央のことが好きなの??」
「…」

「前好きだったんでしょ」

「なんで…いつもそんなこと言わないじゃん」

「前から両想いだったの?俺…KYじゃん」
「…」

「知らない、ふられたし…私。

富田が何でそんなこと言うの??意味わかんない!!

いつもそーやって勝手に…私のことさあ…いつも冷たいし…

好きとか私が聞かなかつたら言うてくれなかつたでしょ!?

何通も書いたお手紙も無視するじゃん

大事な今は今なんじゃないの!?

意味わかんないよ…

富田にだけは…そんなこと言われなくなかつた

いつも…不安だけ残して…私に愛はくれなくつて…寂しいよ…

好きなのに…大好きなのに…なんで伝わらないかなあ…」

泣くな…

泣くな…

冷たいつて思った

一生懸命になつて書いたお手紙は無視するし

話しかけてもたまに無視するし

学校でだつて話すわけでもなく、メールするわけでもなく

…そんなんじゃ、不安になるばかりなの

本当に好きなのかな、とか本当に信じていいのとか…ひどいことば

っかり考えてた

でも、いつも富田の優しさに触れていたこと知ってたよ

嬉しかったの

なんで…大事なときに素直になれないのかあ…

「奈央だつて…簡単に望について行って、2人っきりで話してるのに気にならないわけない!!」

なんで隠すんだよ…

悪かったな!余裕なくって…」

男の子はずるい…いつもそうやって悲しそうな顔を見てしまえば、私は触れたくてたまらなくなっちゃうんだよ

ぎゅうっ

私は気持ちを抑えられなくなって抱きついた

「え…え…え…」

「…好き、なの。望じゃなくて富田が。

いつまでも大好きでたままないよ」

さつきよりも力を込める

「…俺にとつて付き合うのもバレンタインもらうのも、キッ…キスだつて初めてなんだよ…」

余裕なんてどこにもなくて

でも奈央はどんどん次に行ってしまう気がして…正直つかめなかつたんだ

ずっと、こうしてたいって俺は思ってる…

だけど好きな子1人抱きしめるのだって…結構大変なんだよ…」

たぶんこの声は、私がいる距離にしか届かない

「…それだけ愛があるってことじゃん」
ちよつとだけ背伸びをして頬にキスをした

赤くなる君が愛しい
もつともつとつて、求めたい
まがままだって君だから言いたいのに

やっぱり機嫌が悪くてもむーってなってる時は私にむーの意味を教
えてほしい
少しでも一緒に分かち合いたい
私と一緒にいることが少しでも君のプラスになったらいいな
悲しいのだって半分こ
嬉しいのは2倍
それってすごい素敵なことだなあって思うよ
君は…どうかなあ??

横にあるガードレールに私を座らせた
「愛、あるから」
そつと私の顔に手を添える
時間をかけてゆっくりと愛しい人が私との距離をちじめる
嬉しいような、恥ずかしいような…もどかしい時間。

目を閉じればそこに君がいない
でも唇ににぬくもりを感じる

“愛あるから”

1つ1つが愛しい

君すべてを感じていたい

久々の君の愛を私は感じてる

嬉しくて泣いちゃいそうだよ

こんな彼女でごめんね

わがままばかりでごめんね

不安って言うて結局は君を傷つけてた…

可愛げもないし、すぐ怒っちゃうし…本当にもっと彗みたいな子が
富田のことが好きだったら富田もきつとみんなに自慢できるし幸せ
だろうな…って思う

でもね、私まがままなの。だから好きな人は私の手で幸せにしたいよ

今、君は“幸せだなあ”って思ってくれてるかなあ??

私は君といられて触れられることが何よりの幸せだよ

そつと顔が離れる

ゆっくりと目を開ければそこには真つ赤な富田がいる

自然と笑顔になった

「あ…雪…」

「わあ、本当だ…」

そつと降ってきた雪をつかまえた
すうつと雪はとけていった

そのまま手を空にかざした

「なんだか…月だつて星だつて捕まえられそうなのがする」

…たぶん、君は意味がわからなかっただろうね

でもね、私の気持ちにはそのコトバがぴったりだと思った

雪は私の手の中でとけていつてしまったけど、あの遠くに光る月も
星だつて今だつたら手が届きそう。

前見上げた空よりも今見える空のほうが近い気がした
なんでかな？？

君とだつたら、大きな夢も叶えられるような気がする…

だつて君と出会えたことも今一緒にいること、そして…「好きだよ」
つて言ってくれる奇跡だつて“幸せ”に変えられたんだよ

君の優しさに触れて私はもっと大人になれた
もっと好きになることができたの

「寒いね」

富田がぎゅって抱きしめてくれた
ちよつと照れた声…

「暖かい…」

力が強くなって、ちょっとだけ痛かった
その痛みさえ心地いいと感じる

「俺、本当に奈央だけだから。」

トクン、トクンって心臓の音が伝わってきた

愛おしい

君だけ。

この世界にたった1人の君が私は、好きで好きでたまりません

星降ル夜、君ヲ抱キシメル

「愛、かなりあるから」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5905d/>

愛ってコトバ

2010年12月19日07時03分発行